

# 道 どうひょう 標

*d o h y o*

年間特集 「看取る」ということ、「看取られる」ということ

2018 夏季号

第三回・ひとの生と死を見つめることは、

自分の生き方を見つめなおすこと。 井上 須美子さん

## 連載

あなたのいのちの物語	いのちの源に帰る
習わしを科学する	飲む
道しるべ	淤泥華 泥の中に咲く華



## 年間特集

「看取る」ということ、  
「看取られる」ということ。

井上須美子さん

第三回「ひとの生と死に寄り添うことは、  
自らの生き方を見つめなおすこと。」

## 母の死、祖母の死、父の死。

コルカタに拠点を移したのは、母の五十回忌と父の十三回忌法要を済ませた後だった。既に兄の難病の兆候が始まっていたこともあり、法要の席では、親戚の人達に御礼と自分の思いを伝えた。

「私は、若くして逝った母と、再婚もせずに子供三人を育ててくれた父のもとに生を受けたことを誇りに思っています」と。そしてコルカタでいのちの限り人のために生きて、両親に恩返ししたいとも。

商家に嫁ぎ、商いの手伝いをしつつ、住込み人と家族の賄いをこなす、夕膳には父にお造り等の一品を添え、自分はいつも残り物を食べる、そんな昔気質の母。父が胆石で入院

中、自分の乳癌進行を隠して商いを守った。父が退院する日にやっと告白してすぐに他の病院に入ったものの、既に余命僅かであったようだ。

父は母の症状を子供には告げずにおおきにな」と話しかける父の丸い背中が今も脳裏に焼きついている。葬儀ののち、ご近所さんや親戚の人達から聞く母の人となり、数少ない母との思い出を重ね合わせ、無性に自慢したい気持ちだった。母方の祖母は、何度も訪ねてきて、「申

し訳ない、こんなに早く娘が逝ってしまい……、どうぞ後添えさんを」と懇願したようだが、父は頑として受け入れなかった。祖母は、幼い孫たちの母親代わりのつもりか、季節の祭事にはご馳走を手作りして届けたり、父の愚痴の聞き役になった。

末っ子の私は、度々祖母の家に行き、しなびた乳をまさぐりながら寝て、朝は線香の香り漂う部屋で目覚め、仏壇に水や炊き立てご飯を供えて祈る祖母の、当たり前前の日常に馴染んだ。

そんな祖母も老いて亡くなり、父も病がちな晩年を過ごした。独り立ちしていた私は、兄嫁とともに病院通いを続けた。肺癌の症状が落ち着き、最後の外泊を許された晩、好物のすき焼き鍋を皆で囲んだ。朝、車で送る途中、助手席の父がぼそっと放った言葉がずしんと胸に刺さってきた。

「わしなあー、前世で何か悪いことしたんやろか、病気がっかりして、

ライオンの会でもいつも一人で、寂しかったわ……」。頑固一徹の父が吐いた最後の最後の本音。言葉を返せなかった。父の寂しさを慮れなかつた自分が情けなかつた。

その約一か月後、いよいよ危篤状態に。私は数日病院に泊まり込んだ。酸素の流量をフルにしても息苦しさは変わらず、マスクを自分で外し「殺せえ……!!」と叫んだ。兄を呼び出し相談して「今の苦しきから解放してやって」とナースに頼んだ。医師の許可を得て、鎮静剤を注射してくれた。波が引くように穏やかな顔になり、逝った。享年八十歳。

もしあちらで母と再会したなら、生前言えなかつたねぎらいの言葉を沢山かけてほっこり向き合って欲しいと祈ったものだ。身近な人との別れを重ねるたび、いのちの重さを感じ、どう生きればいいのか思索した。

## 人々に魂の平安を

今、コルカタの地にマザー・テレサが設立した「死を待つ人の家」

で活動している。貧しい人たちの生と死に寄り添っていると、途方もな

「身近な人との別れを重ねるたび、

命の重さを感じ、

どう生きればいいのか思索した。」



い無力感にと  
らわれること  
も多い。

マザー曰

く「介護を受ける重病の人や、看取られ死に逝く人々は、明るさと楽しさと喜びの心をもった真の愛（あなたを必要とし、あなたの平安を、心から願っていますという強い思い）を捧げられることにより、その魂の真の安らぎを得るのです。」十三年を経て、自分がどれだけの人々に魂の平安を与えられたか、心許ない。

六十六年前の設立当時は入所者の七割近くがこの施設で亡くなったが、今は、三割ほどが亡くなり、他は病や傷が癒えて退所するか、別の施設に移される。

ただ、運び込まれてくる人たちの悲惨さは今も同じである。頭ジラミや疥癬<sup>かいせん</sup>、腐った傷口から湧き出る蛆虫、猛烈な悪臭、まずは身体を洗い、長い髪は剃り、創傷治療をして水・食事を与える。血液検査と胸のX線検査は必ず受ける。結核やHIVポジティブが分かれば別の施設に移す。ホスピスだけでなくホスピタルとしてのニーズが増したため、外

部の病院も積極的に利用している。

「させてもらう」日々の中で

入所者は手厚い介護を受けるうちに閉ざしていた心を開いてくれる。やがて、ピクアップされた路上へと戻されるのだが、職なし金なし家無し家族なし、教育受けずの人たちがどうして健康的な生活を送れようか。悲惨さは繰り返される。

「死を待つ人」の疾病は末期癌、肝炎、が多い。私は、この人たちの治療食作りを任されている。というか勝手にしはじめた。咀嚼<sup>そしゃくえんげ</sup>できない人の流動食、経鼻経管栄養の栄養食を、多い時には十名分近く、個々の症状に合わせて、日々の体調に合わせ工夫する。

早朝、まず確認するのは遺体安置室、電気



「死を待つ人の家」の前の路上生活者。

なったということ。そして、重症者のベッドに行き「お早う、痛む!? 食べられそう!? 何か食べたいものある!」と明るく話しかける。どんなに意を尽くしても、別れは来る。

シスターは祈りを捧げ「ありがとうね、貴方に任せさせてくれて」と語りかける。そう、「してあげる」ではなく、「させてもらう」のである。マザーは、貧しい人たちのなかに神を見て、仕えていた。私はというと、洗礼を受けてもいず、何の資格もないまま、貧しさゆえに家族から見放され病んだ人々のケアを続けている。涙の別れも沢山あった。

娼婦街に売られ、エイズと結核を発症してやっと無罪放免になった美しい女性の最期。天井に向け見開いた美しい瞳から、大粒の涙が一滴こぼれたとき、握っていた手に力を入れ、思わず泣いてしまった。「陽気に駆け回り遊んでいた小さい頃もあつたろうに……」。

また、ひき逃げに遭った四十代の女性は腰の骨を折り道端に三日間も放置され、やっとポリスに連れて来られたが、外部で受けた手術の経過が思わしくなく、笑顔を見せるこ

となく逝った。不可触民ゆえの悲しい最期にいつも願うのは、「また貧しく生まれ変わってもどうぞ健康に恵まれますように」、それしかない。マザーのとてつもない愛と行動力に魅せられて今の生き方を選んだが、この社会の底辺で這いつくばって生きる人々の状況は変わりようもなく、際限のない繰り返しの思える。私自身、どんな最期を迎え看取られるのか、神のみぞ知る。何があるかとすべて受け入れますという覚悟はしている。先を思い悩むより、今、私に出来ることを日々精一杯やり続けたい。両親に「よく生きたね」と迎えてもらいたい。

### 井上 須美子 (いのうえ すみこ)

1970年、同志社大学英文学科卒業。松下電器産業(株)(現パナソニック(株))技術本部入社。  
1980年、販売促進企画・制作を業とする会社で、秘書及び営業支援業務。2004年退社  
2005年、マザー・テレサの施設「死を待つ人の家」でボランティア活動を始める。  
2007年、NPO法人レインボー国際協会理事就任「レインボー・ホーム」の運営に関わる。  
2015年、「レインボー・ホーム」の子どもたちを引き取り、自立支援施設「ひまわりホーム」設立、レインボー国際協会の財政支援のもと、内外の男女11名の自立をサポート。

# Your Spiritual Stories あなたの物語 いのちの物語

「宗教」って自分と縁の遠いもの。そんなふうには考えていませんか？この新連載では、身近な「物語」に息づく「宗教のタネ」を掘り出していきます。物語を通して、あなたの「いのち」のあり方を考えてみましょう。

3話目

## 「いのちの源に帰る」



太宰の生家。現在は「斜陽館」として一般公開されている。

太宰治「津軽」『太宰治全集』7、筑摩書房、1967年

戦争が激しさを増す中、三十代の半ばとなった「私」は、生きているうちに、故郷を隅々まで見ておきたいと思ひ立ち、津軽へと向かう。旧友や恩人との再会、そして実家への複雑な思い……。紀行文の形式で「人と人との心の触れ合ひ」を綴った名品。

津軽生まれの太宰治（一九〇九—四八）は、何度か故郷の思い出、また望郷の思いを作品にしている。「思ひ出」（一九三三年）、「帰去来」（四二年）、「故郷」（四三年）、「津軽」（四四年）などだ。

太宰は繰り返される自殺や薬物依存で実家に不義理を重ね、いわば故郷を追い出され、故郷から疎んじられたものとして一生を終えた。故郷をめぐる太宰の作品には、いのちの源から放逐され、寂しさに耐えて生きていかざるをえないことに由来する祈りを形象化しようとしたと見うるものがある。「母の国」へ帰りたいと泣き喚く古事記のスサノオや、親への罪からの浄化を願う仏典の阿闍世王（涅槃経、観無量寿経）を思い出してもよい。

実家はとても豊かな名望家だったが、長兄などとは異なり太宰は実の父母に親しみがなく、経済的に恵ま

れてはいたものの寂しい思いをもつて育った。だが、三歳から八歳まで家事手伝いの越野たけという人がいた。当時一四歳だったこの人が太宰に本を読むことを教えてくれた。「津軽」という作品は津軽各地に取材旅行をし、津軽を紹介するという形を借りて、越野たけに託して「いのちの源」への祈りを形象化した作品と言える。

つつましい生活を送り、義理がたかく人情も篤く、ともに親しみあつて生きることを大事にしている人々が描かれている。津軽特有の「要領の悪さ」などという愛情あふれる表現もある（一二八頁）。ユーモアたつ

ぷりに記されている「Sさん」の「熱狂的な接待ぶり」については今は略さざるをえないが、「私は決して誇張法を用ゐて描写してゐるのではない。この疾風怒濤の如き接待は、津軽人の愛情の表現なのである」とまとめられている（五三頁）。

こうした故郷の人々の心情によつて癒されながらも、「私」の心の奥には疼くものがある。「許されていない」という思いに苦しめられている。この胸の痛みもそこここに描かれている。「私は兄から、あの事件に就いてまだ許されてゐるとは思はない。一生、だめかもしれない。ひびのはひつた茶碗はどう仕様も無い。どうしたつて、もとのとほりにはならない。津軽人は特に、心のひびを忘れない種族である。」（一二〇頁）

最後に越野たけに出会う場面がある。住所を頼りに尋ねていくと少

女に教えられ、運動会の会場でたけに会うことができた。驚いたに違いないがさりげなく、「さ、はひつて運動会を」と小屋に案内し、「ここにお坐りなせえ」と傍に坐らせ、「たけはそれきり何も言わず、きちんと正座してそのモンペの丸い膝にちゃんと両手を置き、子供たちの走るのを熱心に見てゐる。」

「私」はそこで深い心の平和を経験する。「私には何の不満もない。まるで、もう、安心してしまつてゐる。足を投げ出して、ぼんやり運動会を見て、胸中に一つも思ふ事が無かつた」（二五一頁）。わが子を無条件に受け入れる「母」の懐での安らぎである。「いのちの源」をしばらくではあるとしても体験することができる。読者にそう思い起こさせるような結びである。

### 島蘭進（しまぞの すずむ）

1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院実践宗教学研究科教授、著書に、『日本人の死生観を読む』（2012年、朝日新聞出版）、「現代宗教とスピリチュアリティ」（2012年、弘文堂）、「いのちを、つっくつて、もいいですか」（2016年、NHK出版）、「宗教を物語でほどく」（2016年、NHK出版）がある。

# 習わしを科学

する

## 飲む

飲むといえは酒かお茶。共通するところは飲むと気分が変わることです。酒を飲めば酔い、神経が麻痺して感情が抑制できなくなります。茶は飲んでもそれほど影響はありませんが、昔の人は目がさえて眠気がとぶと思っていました。

太平の 眠りをさます

ジョーキセン

これはペリーが黒船にのって来航した時、大騒ぎする江戸の世情を皮肉った狂歌です。問題は「ジョーキセン」で、一般には蒸気船、すなわちペリーが乗ってきた回輪の着いた船の意味に取っています。それは狂歌の裏の意味で、本当は上喜撰じょうきせんの文字なのです。喜撰は喜撰法師が宇治に隠棲した喜撰山のこと。それを茶の銘柄にした宇治茶のブランド名です。喜撰という銘のお茶の中でも上等なのが上喜撰。狂歌の表の意味は上等な宇治茶を四杯飲んだら



夜眠れずに大変だった、ということでした。上喜撰と蒸気船をひっかけたところが面白いのです。要は茶の効果は覚醒作用であるということ、茶に含まれているカフェインの効能です。

お酒は麻酔作用、お茶は覚醒作用と全く反対の効果ですが、いずれも精神に作用するところが共通しています。それ故に人類は両方とも手離せないのです。

もう一つ共通する点は、人の気分をかえることから発生すると思われませんが、飲む儀式を伴うことです。酒は本来一人で飲むものではありません。さしつさされつ、という言葉がありますように、互

いに酌をして飲みます。もつと古くは一つの盃を巡らせて酒を飲む儀式がありました。式三献しきさんけんといって、武家の宴会ではその冒頭に盃さかずきを三回、主君と家臣の間を巡らせて主従の固めの盃としました。「荒城の月」の歌詞に「春高樓の花の宴・巡る盃影さして」とある巡る盃がこれです。

茶の湯の文化が生まれますと、酒のかわりにお茶で巡る盃を模倣しました。それが濃茶の廻し飲みです。今も茶会では、客の人数分のお茶が一つの茶碗で練られ、この茶碗を正客から次客へ、さらに三客へと廻し、一人ずつ適量飲んで、末客で飲み切ります。はじめの時はちよつと抵抗があるかもしれませんが、知らない人が飲んだあと、その飲みかけが廻ってくるのですから。

しかしここに日本文化があります。いやだなという抵抗をのりこえると、お互いに赤の他人ではなくなるのです。式三献が主従の契ちぎりであり、三々九度の結婚式の盃めおとが夫婦の契りとなるように、盃ともがらの応酬も濃茶の廻しのみも、輩と

しての契りになります。茶の湯でいう「直心の交わりちきんのかわり」に通じます。

どうしたら人と人が親しくなれるのか。これは社交の根本ですが、日常性を脱する効果がある酒と茶は、精神的作用の点で大変好都合でした。それを飲むのに、ことさら儀礼化することでその効果をあげようとしたのが巡盃と廻し飲み。

飲むという単純な行為の中に、実は深い意味があるのです。

熊倉 功夫(くまくら いさお)

1943年東京生まれ。東京教育大学卒業、文学博士。筑波大学教授、国立民族学博物館教授、林原美術館館長、静岡文化芸術大学学長を歴任し、現在 MIHO MUSEUM(三ホミュージアム)館長、国立民族学博物館名誉教授。2013年、中日文化賞受賞。著書に『日本料理の歴史』、『茶の湯といけばなの歴史 日本の生活文化』、『後水尾天皇』、『文化としてのマナー』、『現代語訳 南方録』、『茶の湯日和 うんちくに遊ぶ』、『日本人のこころの言葉 千利休』、熊倉功夫著作集(全7巻)等多数。専門分野は日本文化史、茶道史。

## 淤泥華

—— 泥の中に咲く華 ——

関西地方ではお盆を旧盆で八月につとめる。そのとき、蓮のつぼみを仏前に供えることがほぼ習慣化している。希に仏前で花開くこともあるが、水揚げのむずかしい蓮は大抵すぐに黒く萎んでしまう。

真夏の炎天下に大きく薄緑の葉をひろげ、白や薄紅色に開く蓮は、凛とした気品に満ち、きよらかに、さわやかに、すゞやかに、はなやかに、厳かに、泥池を飾っていく。しかもこの花には徒花がない。故に世の東西を問わず「瑞華」と称されてきた。

親鸞聖人は「淤泥華」というは経に説いてはいはく。高原の陸地には蓮を生ぜず、卑湿の淤泥に蓮華を生ず。これは凡夫、煩惱の泥中にありて、仏の正覚の華を生ずるに喩うるなり。これは如来の本弘誓不可思議力を示す。」「(『入出二門偈』)と述べておられる。

静寂なイメージを持たれる仏の覚

りは、煩惱を断ち切ることによって実現すると考えられている。一面その通りと言えるだろう。しかし、覚りの象徴である蓮が淤泥華と称されるのは、汚泥に根を張ることによってのみ清純な華を咲かせるからである。煩悩悩む人びとの苦悩を離れて仏の大悲の場はあり得ない。

まさに「高原の陸地には蓮華を生ぜず」である。貪り、いかり、愚かさ、虚しさ……、人々の汚泥に根を張って、清浄、歡喜、智慧の蓮華は開かれるのである。しかし、煩惱を離れないといっても、無批判な欲望を助けるものでは決してない。自らの生き方を深く見つめ、内にひそむ底知れない貪り、憎しみ、愚かさという汚泥に気づき、その故に煩悩悩む者の人生に根を張り、その汚泥を本源として清らかな花を開かせ、必ず豊かに実らせていく。それを仏の大慈悲というのである。



## 編集後記

『嘘も方便』『方便』は元々、仏教の言葉、衆生を真の教えに導く為に用いる巧みな手段という意味である。「嘘」と一緒に使うとどうもその逆の意味に使われているみたいである。テレビでの連日の国会答弁や記者会見を見る限り「時と場合によっては、嘘も手段として必要である」それどころか法的に問題がなければ何をしても何を言ってもいいんだとも取れる。職業人としては満点かもしれないが果たしてこれを見ている子供たちの模範となれるであろうか？

「弥陀の本願まことにおわしませば、釈尊の説教、虚言なるべからず」(歎異抄第二条)。親鸞聖人は阿弥陀仏の本願がまこと「真実であるから釈迦の説教は嘘であるはずがない」と言い切られる。最初に「まこと」「真実」があるのである。今の日本社会にはその「まこと」という言葉が見当たらない。今回特集の井上さんの言葉「マザー・テレサ師のとてつもない愛と行動力に魅せられて今の生き方を選んだ」とある。やはり「まこと」そして「信」が一番大切なことであると教えられる。

合掌

## 蓮華

表紙の絵

日本も季節の暑、寒の差が大きく温暖化どころか熱帯化しています。蓮の花も七月に入ると咲くようになりました。春には芽もでていないのに、あっという間に成長します。釈尊が入滅されてから五百年近く、人の形で表現することは恐れおおくて造仏されませんでした。最初は仏塔(ストゥーパ)で、そのあと三宝印や生涯の四大事蹟などを象徴化した形のものがつくられました。蓮はどんなに汚れた泥の中からでも美しい花が開くということ誕生の象徴とされました。

畠中光亨(はたなか こうきょう)

日本画家／インド美術研究家  
／真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは  
お気軽にお問い合わせ下さい

株式会社 廣瀬佛壇店

☎0120-81-7065 ☎06-6771-7007

ホームページ <http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/> (詳細地図有り)

〒543-0062 大阪市天王寺区逢坂2丁目1-12

(四天王寺西門交差点 西へ30m)